



Title	ブロンテ詩の形而下的世界 : エミリ「最後の」詩をめぐって
Author(s)	正木, 恒夫
Citation	大阪外大英米研究. 1977, 10, p. 37-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブロンテ詩の形而下の世界 — エミリ「最後の」詩を めぐって

正 木 恒 夫

恐れを知らぬ私の魂
吹きすさぶこの世の嵐にもたじろがず
ひたすら神の栄光を見る
信仰の光も等しく輝き
私の心にかげりはない

“No coward soul is mine” という力強い言葉で始まるこの詩は、数多いエミリ・ブロンテの詩作の中でも、おそらくもっとも有名なものだろう。人はここに、エミリの思想の集約された姿を見る。

おお胸のうちに神よ
常に私と共にある全能のあなた
あなたは私に宿るいのち
そして永遠のいのちである私は
あなたによって力をうける

彼女の青春をおそった精神の激動をこえて、エミリは今内面の神との完全な合一の中に、休らっているかのようだ。エミリがこの詩を完成したのは、ハットフィールドの定本¹⁾によると1846年1月2日。それに先立つ10年の間に、エミリは190篇に及ぶ詩を書き残している。我々はそれらの詩の中に、彼女の精神の遍歴がさまざまな屈折をへて投影されているのを見るのだが、上の詩はいわばその総決算とみなされることが多い。そのためいつのまにか、これがエミリ最後

の詩、いわば辞世の一句に他ならないという「常識」ができあがってしまう。現に近刊のオックスフォード版詩文選²⁾を見ると、編者たちはこの詩に “Last Lines” という表題を、一切の注釈ぬきで与えている。ブロンテ研究家の次のような言葉も、こうした常識を補強する効果を持つだろう。

〔この詩は〕精神的な意味で文字通りエミリ・ブロンテの〈最後の詩〉であり、最終的信仰告白である。³⁾

いやそもそもこの「常識」を作り上げた張本人は、エミリの姉シャーロットその人ではなかったか。エミリがなくなった翌翌年——1850年に、シャーロットは2人の妹（エミリとアン）の2つの小説（『嵐が丘』と『アグネス・グレイ』）をあわせて出版しているが、その際彼女はエミリの詩稿の中から未完のもの18篇を選んでのせた。その中に上に引いた名高い詩が含まれていたのは当然のこととして、シャーロットはこの詩の冒頭に「これが妹エミリ最後の詩作（the last lines）となった。」という注釈をそえているのである。

なぜシャーロットがそうしたのかは分からない。ただ確かなことはこの編注が事実と反していること、しかもそれをシャーロットは承知の上でのことに違いないということだ。ハットフィールドによれば⁴⁾シャーロットが底本に用いたのは、1844年以来エミリが清書に使っていた2冊の詩作ノートであって、その1冊（ハットフィールドの分類では自筆原稿「B」）には上の詩よりも新しい日付（1846年9月14日と1848年5月13日）をもった2つの詩が含まれている。それがシャーロットの目にとまらなかったとは考えにくい。それらの詩を選集にのせるかどうかは編者の自由だが、その存在を無視してまで、“No coward...”の一篇に “the last lines” という説明を加えるというのは、少々念が入りすぎている。念が入りすぎたといえ、ハットフィールドが明らかにしたように、シャーロットはこの注釈にとどまらず、18篇の詩のテキストそのものに、きわめて自由に手を加えている。そればかりではない。18篇の中にはエミリの自筆

原稿が見当らず、おそらくはシャーロット自身の創作ではないかと思われるものが1つある。⁵⁾「人がいくら責めようと、私は戻らずにはいられない…」

(“Often rebuked, but always back returning…”) で始まる、これ又「有名な」(むろんエミリの作として)一篇がそれで、前記オックスフォード詩文選の編者たちは、偽作とおぼしきこの詩と、“Last Lines” という誤った表題をつけた例の詩と、この2篇によってエミリの全詩作を代表させているのだから、これ又相当に念の入った話といわねばならぬ。

それはさておき、上の“No coward…”で始まる詩(通例ハットフィールドの年代順番号に従ってH. 191 とよぶ)に続く2篇の詩(H. 192 とH. 193)は、エミリ没後2年をへずして、既に忘れ去られる運命にあったといえそうだ。シャーロットがいやがる妹たちを説き伏せて最初の詩集を刊行したのは、1846年のことだった。それ以後1850年、1902年、1910年と、エミリの詩作はさまざまな経路をへて印刷されていくが、問題の2つの詩が日の目を見るためには、1915年、ベンスン編ブロンテ詩選集の刊行を待たねばならなかった。しかもこの選集では、H. 193 は全文収録されたものの、長大なH. 192 は部分的に印刷されたにすぎず、その全文が公にされたのは1941年、ハットフィールド定本の完成によってであった。だがハットフィールドの厳密な校訂によってエミリの詩作の全貌がほぼ明らかにされてからも、これら2篇の詩は批評家によっておおむね無視されてきた。先に引用した中岡洋の『エミリ・ブロンテ論』は、日本における数少ない本格的なブロンテ詩研究の1つだが、その中で中岡氏は「精神的な意味で」と断わりながらも、結局はH. 191 の有名な詩が「文字通りエミリ・ブロンテの〈最後の詩〉であり、最終的信仰告白である。」と断定することによって、これに続く2つの詩の存在を抹殺している。現に300ページをこえるこの長大な研究の中で、中岡氏はこれらの詩には遂に1度もふれることがない。それはなぜか。1846年に書かれたH. 192 はともかく、1846年5月13日の日付をもつH. 193 は、エミリが死の半年前に書いた文字通りの「絶筆」であるにもかかわらず、なぜ人はこれを無視してむしろH. 191 を彼女の最後の

詩と考えたがるのか。なるほどH・192は未完のまま残されているし、又これの要約ともいえるH・193も完成された作品とはいいいがたい。だがそれにしてもある作家が最晩年に書き残した作品を黙殺するというのは、作家研究の常識からいっても奇妙なことではあるまいか。私はここに今日支配的な、あるかたよったブロンテ観の影響を見ないわけにはいかないのである。

そのブロンテ観とは、例えば次のようなものだ。

【エミリの】神経過敏で、傷つくことを恐れて人との接触を意識的に避けないではいられない性格は劣等感を形成し、強いノイローゼを惹き起こした。心の内へ、内へと向かってゆく彼女の傾向は何よりもその文学に表れている。⁶⁾

エミリー・ブロンテは神との合一の法悦の証を外的自然に見るのではなかった。純粋経験はあくまでも内面的なものであり、純化すればするほど外界との関係は薄れてゆき、ついにはことばさえ忘れられて、沈黙の忘我状態となるのである。このようにエミリー・ブロンテには一貫して内攻性の特性があり、内へ内へと向かう動きを、その神秘経験においても指摘することができるのである。⁷⁾

このような立場からは、H・191のような思弁的な作品——そのいささかあいまいな⁸⁾「信仰告白」を高く評価することはできても、H・192やH・193のように、外側に向かって開かれたエミリの巾広い文学意識をとりこむことはできないだろう。

エミリの絶筆となったH・193は、戦争詩である。それは次の5節からなっている。

いつの時代、いづこの国かは問うまい
そこにいたのは他ならぬ人間、わが同胞
太古のむかしから権力をあがめ

勝ちほこる罪惡の前にひれふし
力弱き者たちを無残にもふみつけ
正義を倒して惡をたたえる
どうせ弱い正義なら
むしろ惡をといわぬばかりに

血を流しては涙を流し
自らを呪い、かつ苦しめる
しかも慈悲なき者への慈悲を求めて
空しい祈りに神を汚す

時は秋、麦の穂の黄ばむ頃
来る日も来る日も日がな一日
初夏のように明るい太陽が
八月の空に輝いていた

だが暑さにあえぐ大地も光り輝く大空も
それを見やる者とていない
うれた麦の穂を刈る手もなく
それを束ねる人影もなかった

取り入れはもうすんでいたのだ—— 幾月も

前のこと

麦粒は残らずむしり取られ血糊でこねあげられた
乳のように甘い穂をふみしだいていったのは
狂気のように突進する人の足、馬のひずめ——
そして私は戦った、国のためでも神のためでもなく

二重に呪われた異邦人の、この私

一見して明らかなように、これは単純な戦争詩ではない。戦争の悲惨が歌われていることは確かとしても、エミリはまず冒頭の数行で舞台を現実の歴史の中に置くことを拒否し、戦争がいわば人間の根源悪につながる罪業だとする、暗い人間観をうちだしている。それに末尾の2行に登場する「私」が誰なのか、よくわからない。外国の戦場であって罪の意識にさいなまれるこの人物は、一体どんな罪を犯したというのか。しかもこの謎めいた2行で詩が終わっているのだから、この詩は結局未完成のまま残されたのではないかという印象さえ与える。それもそのはずで、この詩は実は、約1年8カ月前の日付をもつ別の詩——H. 192の最初の34行を、25行に書き縮めたものなのである。そこで我々はエミリの絶筆を問題にしようとするれば、当然それに先立つ長大なH. 192を問題にしないわけにはいかない。

H. 192は全部で263行からなる。エミリが残した193篇の詩の中でも、きわだって長いものだ。ところがこれ又完成された作品とはいいいがたい。ハットフィールドによれば、⁹⁾148行までは既に下書があったものらしく、修正はごくわずかだが、149行以下は無数の削除訂正があって判読不能の箇所すら少なくない。ハットフィールドは「未完 (unfinished)」という言葉を慎重にさけて、「不完全な状態 (in an incomplete state)」という表現を用いているが、終わり方がいかにも唐突で、おそらくは結末に近い所でいったん放棄したものを、1年数カ月後に再びとりあげ完成をめざしながら、結局はたさなかったものであろう。それはともかく、H. 193の原型となった冒頭の34行とは、次のようなものだ。

いつの時代、いずこの国かは問うまい
それを聞いたとて何になろう
人は神の前にひれふしながら
悪をあがめ弱者をしいたげていた

——我々が今そうしているように

打ち続く戦いの日日
内乱と無秩序の中で
人は死を笑い、生命を幾分軽やかに
眺めるようになっていた

時は秋、農夫にはかけがえない季節
くる日もくる日も日がな一日
初夏のように明るい太陽が
九月の空に輝いていた。
だが鎌を手にする者は誰もいない
取り入れはもうすんでいたのだ、畑の中で
乳のように甘い麦の穂が
馬のひずめにふみしだかれ
涙と血糊にぬめる
麦打場の床でこねあげられた。
もはや天の清らかな雨水が
畑をうるおすことはあるまいと
いう人もいた。だが恵み深い大空が
飢えた目に宿る恐怖をたしなめるかのように
七月は露とにわか雨を運び
八月の空はどこまでも青く明るかった。
収穫の秋はこよなく美しい
取り入れを待つうれた麦穂さえあれば

実をいえば平穏を嫌い
若い欲望につき動かされて

私は母なる祖国の胸をはなれ

この悲しみの国にやってきた

私はまるで闘士扱い —— ただそれがうれしくて

異国の民に向って解放の剣を抜きはなち

自由と忠君の旗の下

骨肉相食む戦いにとびこんで行った

これを H. 193 と比較してすぐ気がつくことは、状況がずっと具体的に与えられていることだ。第 1 節で歴史的現実とのアナロジーを拒否している点は同じだとしても、最後の 1 行（「我々が今そうしているように」）でテーマの現実性が突然、鮮かに示される。第 2 節では戦争が人間を非人間に変えていくさまが適確に描かれているし、第 4・5 節では「私」がいわば外国傭兵として他国の内戦に介入していく、一個の冒険主義者であることが明らかにされる。このように H. 193 では思いきって抽象化されていた戦争の質と「私」の役割が、ここではかなり具体的に提示されているだけでなく、冒頭の暗い人間観が、実は「我々が今そうしている」という現実意識を背後に持つことが分かるのである。

このような状況設定を行なった後に、エミリは「私」の特異な戦争体験を克明に描いていく。「私」は最初、味方（どうやら共和派らしい）の残虐行為に胸を痛めるが、次第にそれにもなれていき、命ごいをする敵に対して「鉄の面をかぶる」（40 行）ことを覚える。それでも人間性を完全に失ったわけではなく、戦争の極限状況に対して示される人間の強弱美醜の種種相を、「私」は深い驚きをもって見つめている（35－65）。そのうち「私」は 1 つの忘れがたい場面について語りはじめる。それは町はずれにそびえるある貴族の館。外には中秋の月がこうこうと輝いている。室内に横たわっているのは、革命軍の手に落ちたこの館の若い主だ。重傷を負った彼の身体は、既に動く力もない。昼間の戦闘で捕虜になった 80 名の兵士たちは全員射殺され、隊長であったこの青年だけが、意志

に反して生かされているのである。苦しい息の下から早く殺してほしいと懇願する青年に対して、革命軍の将校は冷笑をあびせる。

そう頼むのが貧乏人なら

かわいそうだから聞いてもやろう

金持は別だ、死ぬなどという特権は

金を積んで買い取ってもらおう（92-5）

その夜「私」は青年のかたわらで見張りにつくが、うめき声が耳について、昼間の疲れをいやすこともできない。既に感覚を失った身体に向かって、「私」は悪罵を放つ（128-135）。長い夜がようやく明けた。だが青年が意識を取り戻す様子はない。「私」は彼が身につけている宝石類を盗み取り、再び悪態について館を後にするが、その残酷なのしりに意識がよみがえったのか、青ざめた顔にかすかな祈りに似た表情がただよう。その時は無神経に見すごしたその表情が、今になって「私」の心を苦しめるのである（186-9）。中庭に降り立った「私」は泉水の水を飲み、食物を求めて口にするが、それがどちらも真赤にそまっている。館に戻ろうとすると、やせ衰えた身体にぼろをまとった女の子が、父に一目会わせてほしいと「私」にすがりつく（203-7）。「私」はその手を邪険に払いのけ、「金貨のかくし場所を明かさなければ、日の暮れにはお前にも親父の後を追ってもらうまでだ。」とおどす。それを聞きつけたのか、ひときわ高くなったうめき声を私はこっけいに真似てみせ、「貴族なら貴族らしく、だまって気高く死んでみせたらどうだ。」などという（215-9）。

ところがここで、事態は意外な展開をみせる。同志の1人がかけこんできて、敵の報復行為が始まったことを告げるのだ。王党側が革命軍兵士の家族をとらえて、明朝処刑するといっているが、その中には「私」の1人息子も含まれているという。それを聞くなり「私」は捕虜の前にひれふし、息子の命を助けるために力をかしてほしいとなりふりかまわず訴える。一瞬意識を取り戻した青年は、微

昨夜私は一人娘を失った

私の腕の中で二度、ひざの上で又二度

お前は娘を刺して笑った（237-9）

と苦しい息の下から語り始める。だが同じ苦しみを敵にも味わわせようとは思わない。助命を願う文を書けば署名してやろう、というのである。おかげで「私」の子供は救われるが、ほどなく息絶えた青年をよみがえらせることは、「私」にはできない。罪の意識にさいなまれた「私」は、幸い一命をとりとめていた娘をたずねあてて養育するが、自分に向けられる激しい憎悪にたえきれず、遂に「ある月のない夜、私は娘を手放し」てしまう（263）。

以上の要約をみても分かるように、H. 192は十分な膨たきをへた作品とはいいがたい。単に未完に終わっているというだけでなく、語法にも不用意な所がある。（例えば “Was it not foul *disgrace* and shame To thus *disgrace* his ancient name?”（218-9） — イタリックは引用者）又つじつまのあわない箇所も少なくない。例えば203行以下に登場する娘と、247行で「私」に刺殺された（と青年が思った）娘、それに258行以下で私が探し出し養育する娘は、全て同一人物をさすのであろう。だとすれば「私」が娘の生きた姿を目撃していながら、その（おそらく）数日後に「生きた姿にめぐりあった」（found alive）（257）という言い方はおかしい。又それ以上に不可解なのは、娘の訴えをしりぞける「私」の声を聞きつけて、いっそう高くうめき声をあげた青年が、その直後に「私」を娘殺害の下手人呼ばわりしていることだ。しかし問題は文学的完成度の低さを理由に、この詩（とそれに基づくH. 193）を黙殺してよいかということであろう。私はいくつかの理由から、これらの詩を正当に評価することなしに、ブロンテ文学の理解はありえないと考えるのである。

まず第1に、これらの詩のテーマに対するエミリの執着ということがある。エ

ミリは1836年から1848年にいたる13年間に、193篇の詩を書いた。そのうち132篇までが最初の4年間に書かれており、それ以後は1845年まで、ブリュッセル留学の1842年をのぞき、毎年ほぼ平均して10篇程度の詩が書かれている。ところが1846年(この年の5月に姉妹の詩集が出ている)以後彼女はほとんど詩作をやめており、1848年にいたる3年間にわずか3篇が残されているにすぎない。その理由の1つとして当然考えられるのは、1845年末に開始され翌年夏頃には完了していたとされる¹⁰⁾『嵐が丘』の執筆であろう。エミリは『嵐が丘』に着手してまもない頃にH.191 (“No coward...”) を書き、その完成から1・2ヵ月後に上のH.192を書いたことになる。『嵐が丘』のあの堅固で不敵な文学世界の構築を終えて、今彼女は新たなテーマに、彼女としては異例の263行をついやして取り組もうとする。しかもこれだけの行数をついやしてなお、彼女はこのテーマを語りつくすことができない。エミリはいったん詩作を放棄して、あくる1847年(『嵐が丘』出版の年)はついに完全な沈黙のうちにすごしてしまう。ところが翌年の5月になって、彼女は再びH.192をとりあげ、その推こうにとりかかる。つまり1846年初頭に書かれたH.191を別にすれば、エミリ・ブロンテは生涯の最後の3年間に、たった2つの詩を1つのテーマについて書いたことになる。しかもこれら2つの詩の間には1年8ヵ月という時間の経過があるのだから、我々は当然このテーマによせるエミリの関心の強さを予想せずにはおれないのである。

そのテーマとは一体何か。前にも指摘したように、H.192とH.193の間には微妙な差があるが、ここでは一応それを度外視することにして、より具体的なH.192を中心に考えるなら、そのテーマとは戦争であり、戦争と個人であり、又より根源的には人間の罪とそのあがない、そして神と人間の慈悲の問題を含むと考えてよかろう。従来の観念的なブロンテ観からすれば、当然これらのテーマの後半をもっぱら論ずることになるが、エミリ自身は決して人間内面の問題を、外部世界から切りはなして考えてはいない。その証拠の1つに、彼女の詩の世界における戦争描写の重要性ということがある。

エミリの詩作の中には、戦争詩といえるものが全部で10篇あり（H.17, 29, 40, 89, 104, 156, 164, 175, 192, 193），その他戦争を背景にもつ詩が3篇（H.63, 185, 190）ある。これらはいずれもエミリが妹アンと共に、少女時代（1831年頃）から作りあげてきた「ゴンドル伝説」の枠組みの中で書かれたものである。「ゴンドル伝説」というのは、北太平洋に横たわる架空の島国ゴンドルをめぐる一種の叙事文学だが、その中心をなす散文は全て失われてしまった。我我は今日わずかに残された姉妹の日記の断片と、かなりの数にのぼる詩を通じてその内容をうかがい知ることができるにすぎない。ところで18年にも及ぶ長い歳月にわたって彼女たちがこうした独特の想像の世界を育んでいたことの中に、人はブロンテ文学の主観的・内攻的な性格を見がちだが、はたして「ゴンドル伝説」はそれほど非現実的なものだろうか。さまざまな学者の復元¹¹⁾によって「伝説」の梗概をみると、そこにあるのは領土獲得のための侵略戦争であり、政治的陰謀であり、暗殺であり、共和主義革命である。むろんそれらは幾人かの主要人物をめぐる愛と裏切りの、さめたロマンスの背景という性格をおびてはいる。しかしゴンドルの世界は要するに、18世紀後半から19世紀前半にかけての、ヨーロッパ政治史の反映とみてさしつかえない。とりわけ「伝説」後半にゴンドルをおそう共和主義革命など、フランス革命の現実をぬきにしては考えられないものであろう。エミリはおそらくそれらの政治的現実を、単に時代の息吹きとして無意識のうちに反映したというのではあるまい。彼女自身の政治意識を物語る外的証拠は何一つ残されてはいないが、我我はギヤスケル夫人のおかげでブロンテ一家の旺盛な政治的関心について、又姉シャーロットの積極的な保守主義について、きわめて具体的に知ることができる。例えば1829年、カトリック解放案をめぐる議会の動きを、固唾をのんで見守る一家の表情や、¹²⁾ 1832年、第1次選挙法改正案が上院で葬られたとの報に狂喜するシャーロットの姿を、¹³⁾ ギヤスケル夫人はシャーロット自身の筆によっていきいきと伝えている。いやそもそも問題のH.193にしても、他ならぬ1848年という年に戦争——それも共和主義革命による内戦という素材に立ち戻っていったという

事実の中に、この年フランスに起こり中欧に燃え広がった2月革命が、影を落としていないといいきれるだろうか。現にこの年の3月、エミリの姉シャーロットは、ロウ・ヘッド時代の恩師ウラー女史にあてた手紙の中で、2月革命に触発された彼女の戦争観・革命観を語っているのである。¹⁴⁾

ところで例によって保守的なこの手紙の中に、次のような言葉がある。

少女時代の私はナポレオン戦争の頃の、あの激動の最中に生まれあわせなかったことを悔やんだりしたものでした。勇ましい話など聞かされると、ただもうわくわく、うっとりで、胸がドキドキしてくるのです…でも今は10年前とは違います…戦争につきものの恰好のよさが、私の目をくらませることはさすがになくなりました。

エミリにもそのような時代が——戦争の華やかさに幻惑された時代があったのだろうか。今日我に残された彼女の戦争詩は、その最も古いもの(19才の作)から既に、戦争の実態をさめた目で見つくしている。戦場に残された死者の姿に視点を合わせたH.17。戦争による荒廃を描き、月明かりに白く浮かんた大伽藍が「埋もれた悲しみ」の廃墟を見下ろすというイメージの印象的なH.29。英雄ジュリアスのがい歌のようでありながら、それが実は嘆きの声・悲しみのためいきをかきけす努力に他ならないことが分かるH.40。エルベのアレグザンダーの死と、敵のがい歌を追ってわき起こる嘆きとうめきの声を歌ったH.89。圧政者との戦いから帰らなかった者たちを待ち続ける人人の姿を描いたH.104。敗戦の悲惨を描き、祖国解放の訴えで終わるH.156。兵士ロドリック・レズリの戦死を悲しむH.164。せまりくる内戦を前に、愛しあう者同志が殺しあわねばならぬ苦しみを歌ったH.175。そしてH.192と193。このように10篇の戦争詩の全てが、もっぱら戦争の悲惨を描いている。それらは例外なしに、破壊と殺りくの物語であり、嘆きと苦しみの詩である。これは見落としてはならない事実であろう。エミリの戦争詩は決して、学者が「ゴンドル伝説」を復元する

ための、単なる素材ではないのである。¹⁵⁾

このようにみえてくると、H・192という詩が、それ以前の戦争詩の集大成として記念碑的な作品になるはずの、いわば未完の大作であったことが分かる。ここでは戦争の悲惨が、一步進んで個人の内面の問題としてとらえられる。戦争が人間を残酷にする。ところで残酷になった人間の犯した罪は、一体どうすればあがなうことができるのか。「私」の犯した罪は、被害者たる青年貴族の慈悲によって、正当な罰を受けずにすんでしまう。その時「私」は一体どうすればよかったのか。償いのつもりで始めた娘の養育も、結局は彼女の憎しみに妨げられてはたせない。この詩の中途半端な結末は、いったん犯してしまった罪をあがなうことのむずかしさを暗示しているかのようだ。このように戦争のテーマを内面化している所に、この作品の戦争詩としての新しさがあるが、だからといってエミリが、「私」の戦争体験を「純化」して「内へ内へと向か」おうとしていることにはならない。罪を犯した「私」の悪が、決して生得的なものではなく、戦争の中で生みだされたものだということを、エミリは最初の46行をついやして鮮かに示しているのである。

エミリ・ブロンテは生涯を通じて、自分を含めた人間の醜さに苦しみぬいた作家であった。「人間が皆空っぽで、卑屈で、不誠実だと思うだけでも悲しいのに、せめて自分の心だけはと思っていたのが、ああ、何とそこにも同じ醜さが……」（H・11）と彼女が歌ったのは、19才の春だった。人間の醜さ——業と、その救済の可能性。エミリの文学的営為は、全てこの一点に集中していったといえるのではないか。冒頭に引用した“*No coward...*”（H・191）の一篇は、彼女に救済の1つの道を指し示すものであった。だがそれは決して最終的な解決ではなかった。エミリが内部世界を問題にする時、必ず起点として、外部世界に対する痛切な意識が存在する。「外の世界に望みを持たないから、それだけ私は内なる世界を大切にする」（H・174）のであって、その逆ではない。エミリがH・191によって詩作に終止符を打たず、H・192と193において外部世界にいったん戻り、そこから再び内部世界へ降りていこうとしたのは、むしろ当然であ

った。エミリにとって名実共に最後の作品となったこれら2篇の詩をぬきにして、
ブロンテ詩の全貌を明らかにすることはできないのである。

(注)

- 1) C. W. Hatfield (ed.), *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, Columbia U., 1941-1952 3
- 2) L. Trilling and H. Bloom (ed.), *Victorian Prose and Poetry*, The Oxford Anthology of English Literature, Oxford, 1973
- 3) 中岡洋『エミリ・ブロンテ論』(国文社, 1973) 246 ページ。
- 4) Hatfield, *op. cit.*, PP. 4-5,
- 5) *Ibid.*, p. 255
- 6) 中岡前掲書 28 ページ。
- 8) この詩でエミリが語る独得の信仰体系を「堂堂めぐり」(circular) と評した批評家がいる。cf. Denis Donoghue, "Emily Brontë: On the Latitude of Interpretation", reprinted in J. - P. Petit, *Emily Brontë*, Penguin Critical Anthologies, 1973, p. 305
- 9) Hatfield, *op. cit.*, P. 252
- 10) Miriam Allott (ed.), *Emily Brontë: Wuthering Heights*, Casebook Series, Macmillan, 1970, P. 15.
- 11) 中岡前掲書第2部第1章に、そのくわしい紹介がある。
- 12) Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, Penguin Edition, P. 118.
- 13) *Ibid.*, P. 131.
- 14) *Ibid.*, P. 341.
- 15) 中岡氏の著書は約50篇の詩を扱っているが、そのうち私のいう戦争詩は唯の1篇(H. 29)にすぎない。

